

平成 25 年度 岸本国際交流奨学金による海外活動 実施報告書

King's College London School of Medicine

大阪大学医学部 5 年 M.A(Female)

【実習目的】

- ・ 時間的余裕のある学生のうちに海外の臨床医療に触れ、臨床医として海外で働くためには何が必要か、具体的なイメージを持つこと
- ・ 海外の医療制度を知り、そこで行われている医療を体感することで、日本の医療について考える 1 つの視点を得ること
- ・ 約一カ月という比較的長期間海外に滞在することで、自国と異なる文化、人、生活に触れ、自分の視野を広げること

医師となってから海外へ留学する経路としては臨床留学よりも研究留学が多いようで、そうになると卒後かなりの年数が経過してからの留学となる。海外の医療を直接感じられるのは臨床留学だと思われるが、将来的に進む診療科、あるいは職場、家庭など周りの環境によっては留学できる状況かどうかは不明である。海外に興味があり、かつ比較的自由の利く身分のうちに大学からこのようなチャンスを与えていただいたため、是非この機会を生かしたいと考えた。

【実習内容】

基本的に病棟、外来、検査室、カテーテル室のうち、どこでも好きなところを見学していいとのことであった。元々循環器内科に興味があり、カテーテル室を見学するのは面白かったが、行っている手技自体は日本とあまり変わりはないため、実際に患者とのやり取りが見える外来と病棟業務の見学を主にさせていただいた。

<病棟について>

主治医制ではなく、研修医、レジデント、専門医からなるチームで患者を診ており、毎朝チーム回診でその日の治療方針を決めた後、病棟業務は基本的に研修医が担当していた。

実習期間中に英語での問診と身体診察を行うことは目標の 1 つだったので、外来見学を通して問診の仕方、表現を学び、身体診察については現地の医学生と共に行った。イギリスの医学部は 5 年制であり、3 年生から病院で実習が始まるが、イギリスでは日本ほど検査をたくさん行わないため、身体診察能力が高く、学生でもほぼ全員が身体所見をきっちりと取ることができていた。

また、ロンドンは 60%が外国人と言われており、多人種が入り交ざる場所なので宗教の重要性を実感する場面も多々あった。病院内にキリスト教とイスラム教の教会がきちんと用意されていたことにまず驚いた。現地の学生と話していて宗教の話になった際、「医師は人の死に携わる職業だから、患者自身が何の宗教を信じているかを聞くことはその人と付き合う上でとても重要で、かつ必ず聞かなければならないことだ」と言われ、その言葉にはっとさせられた。日本でターミナルケアについてもっと学んでいれば違ったのかもしれないが、患者自身の生と、その延長にある死を見つめる上で、宗教について考えるという視点も日本には中々得られなかったものであった。

<外来について>

イギリスの医療はまずプライマリーヘルスケアの General Practitioner (GP)と呼ばれる家庭医により築

かれており、地域の GP に登録し、まず病気になったら例えその病気が腹痛や頭痛、骨折、皮膚病、眼の疾患など何の病気であろうと GP に相談する、というのが普通である。GP は個人の開業医ではなく、国のシステムに登録されており、その GP が必要と判断したら総合病院や大学病院といった大病院に紹介される。この制度があるため、イギリスの大病院では殆どが予定外来であり、日本のように大病院の外来が人で溢れ返ることは少なく、大病院は専門的治療に特化している。診療内容の分業ができているという意味では一見合理的に見える一方で、時に大病院での診療までの待機時間が半年、一年と長くなることもあり、そのせいで保険外診療となるプライベートホスピタルを受診する患者も多く、問題となっているそうである。一定ラインの医療は国から保障されているものの、それ以上の質の医療を受けなければお金が必要、というのがイギリスの現状である。アメリカの医療ほど露骨ではないにしろ、日本ほど弱者に優しい医療というわけではないようであった。

外来では、医師が患者を待合室に呼びに行き、必ず握手と自己紹介をしてから診察を行う。日本と違い、基本的に医師は白衣を着用しないため、医師という存在の圧迫感は日本より少なく、よりリラックスして患者は診察を受けられそうであった。

また、イギリスでは慢性心不全や糖尿病、COPD といった慢性疾患患者のうち、病状が安定している患者に対しては、医師ではなく Nurse Practitioner が外来を行う場合があり、処方まで行える。もちろん処方のできる Nurse Practitioner になるためには特別な資格が必要だが、医師ではなく看護師も処方ができることに非常に驚いた。医師は治療方針を立てる「司令塔」に特化しており、医師でなくてもできる仕事はほとんど他の役職に割り振っているというのが総じて感じた印象であった。

【実習成果】

今回の実習を通して、日本の医療水準、医療技術の高さを改めて感じたと同時に、CT や MRI 等の検査機器に頼りすぎ、身体診察を比較的軽視してしまっているという現状を認識した。検査機器は便利かつ今の医療に不可欠であるが、患者を直接自分で触れて診るという基本姿勢は大切にしたいと感じた。

また、家庭医制度や 100%保険診療をはじめとするイギリスの医療制度に触れることで日本の医療を考えるきっかけにしようとしたが、それ以前に日本の医療制度について自分があまりにも無知であることを思い知らされたため、それについて調べることで結果的に日本の医療に以前よりも詳しくなった。

今回英語圏であるイギリスで実習を行ったため、実際の患者や看護師、検査技師といったメディカルの方々ともコミュニケーションが取れたのは実に楽しく、自分の英語力向上という意味でも有意義であったし、自信にも繋がった。しかし、外国人医学生として実習している時は、会話する際に相手側も気を遣って下さるのでそれほど不自由を感じないものの、やはり現地で医師として仕事を行うためには言葉の壁はかなり厚そうである。実際向こうのイギリス人以外の医師はインドや香港など、元イギリス領出身で英語を日常的に話している方ばかりであり、患者から見てイギリス人医師と同等に信頼してもらうには相当な努力が必要だと実感した。

また、イギリス(特にロンドン)における宗教が占める重要性について少し述べたが、どこの国で医療を行うにしても結局のところ、宗教を含めた患者さん 1 人 1 人と向き合い、その背景をきちんと考えることが最も重要であると心から感じた。

【今後の抱負】

まだ日本の医療をよくわかっていない段階で海外を見ても仕方がないのではと危惧していたが、実習あるいは現地の生活を通して得るものは多く、良い経験になったと共に自分の視野も確実に広がった。

実習中、トルコやギリシャといった国々から臨床留学に来ている先生方とお話する機会が何度かあったが、どの先生も英語が非常に堪能であった。将来海外で働くかどうか以前に、医師を続ける上で英語力は必要であるため、これからも英語には積極的に触れていこうとの思いが強まった。

また、今回の実習を通じて、当たり前のようにあるため今まであまり意識してこなかった日本の医療制度について考える機会が増え、行政面で医療に携わることにも興味が出てきた。

将来医師としてどのような道に進むかはまだ模索段階であるが、海外実習を通して得たいくつもの興味のきっかけを今後に繋げていきたいと考えている。